

# 巻頭言

## 看護倫理におけるアクティブ・ラーニングの試み

An attempt of active learning in nursing ethics

永田 まなみ

震災からちょうど3か月が経った。罹災直後は、遠方からの給水車に出会うたびに手を合わせる思いがした。まずは全国の皆さまの温かいご支援に感謝申し上げたい。5月の連休明けから大学が再開され、少しずつ日常が戻ってきた。今では震度1や2ではあまり驚かない。7月に入って、揺れない毎日が普通だったことに気づいて苦笑した。震災後はこれまでの在り方を振り返ることも多かった。

### careの再確認

突然の揺れには、ただただ足がすくみ動けなかった。まさか本震が来るとは誰も予想していなかった。停電と断水の中、近くの江図湖畔の湧き水を何度も汲みに行った。水と食料の確保、掃除と洗濯、3度の食事を食べて余震におびえながら眠るということ毎日が過ぎた。生きることは“生活すること”だと実感した。

また、人は一人では生きられない。道行く人は自然と声をかけ合い、人の優しさに触れることも多かった。日頃は挨拶程度のご近所が、私たち親子を気遣って食材や惣菜を届けてくださった。遠方からお見舞いを頂戴し、そのお気持ちがうれしく、勇気づけられた。

忘れないこと、気にかけること、心配すること、不安に思うこと、配慮すること、気遣うこと、世話をすること、震災を通してcareという言葉の意味を改めて思い返した。クラ伝説が示唆するように、Careは、人間が生きている間、人間が人間である以上、切り離せないようだ。

N.ノディングスのケア論の普遍性への批判の一つである“遠方の見知らぬ人へのケア”も、“身近な親しい人へのケア”程の確信はないが、ありかもしれぬと私に思わしめた今回の地震だった。

京都大学霊長類研究所の松沢哲郎教授の研究によれば、98.8%同じ遺伝子をもつといわれるチンパンジーと人との違いは、想像力であり、人は進化の過程で想像力をもち助け合って生き残ってきたそうだ。相手の立場や気持ちに想像力がなければよい看護は成立しない。看護教育では、想像力や倫理的な感性を育むことが最も難しいと考えている。

### 看護倫理の授業を担当して

初めて担当する「看護倫理」(7コマ1単位)の授業を今週から開始した。学部生が大学で看護倫理を学ぶ唯一の機会なので、身が引き締まる思いである。まず時期を検討した。いつが効果的なのかと。本来は後期前半の科目だったが、臨床実習(8月末～9月半ば)の前後に半分ずつ振り分けることにした。前半は基本的知識の習得、後半は、学生自らの感性が臨床体験を通して見出した倫理的要素を学生同士で検討し共有してみる予定である。

約200頁のテキストの内容の何を優先的に教授すればよいのだろうか。いったい私は学生に何を伝えたいのだろうか。臨床では、倫理的問題をよい方向に導くアプローチが求められる。差し迫った状況では無理からぬことだが、学部生

だからこそ基礎的な事柄をよく学んでほしい。自らの行っている看護とは何か、その専門性を分からずして、それがどうあるべきかを考えることは難しいのだから。

なぜ看護が専門職となり、なぜ高学歴化する必要があったのか。1950年代から盛んに行われた看護(の)ケアの理論化が、実は看護がそのケアを看護の独自性やアイデンティティとして論究してきた歴史でもあったことを学部生にはまず噛みしめてほしい。そのうえで専門職としての責任、よい看護について考えてほしい。

そして改めて「ケアの倫理」の理解を深めるべきなのである。高橋隆雄教授は、2013年の『人間と医療』の巻頭で、倫理学における care の理論の重要性に言及されている。この care の理論は、近代的人間観や近代的な倫理的思考とは対峙する形で光があたってきたものである。だからこそ看護師はその care が対峙した相手 (care が批判したもの) をよく知る必要がある。そのことが倫理学の基礎的な知識を得ることにもつながるであろう。

と予測していたが、思いの外年表を作成する作業が進まなかった。その理由は、彼女らの大半が、「地理」で受験をしており、言葉の詳細を調べる時間が必要だったからである。「世界史」で受験した学生は少なかった。

それでも宗教改革がナイチンゲールの『看護覚書き』に影響を及ぼし、J.S.ミルと F ナイチンゲールには書簡のやり取りがあったと聞けば、『自由論』にも少しは興味がわくというものであろう。人を相手にする職業だからこそ、人の思想・歴史・文化について理解を深めておくべきだ。来年への課題がみえてきた。

溜息が出るような事実ではあったが、ピラミッド・ラーニングによれば、講義を聞くだけでは学習の定着が悪く、自らテキストを読み、作業をするなどの体験を通して学習効果は高くなるらしい。少なくとも、「ジュネーブ宣言」って何？と自分で言葉を調べてみることは重要と思われる。さて来週はどうなることか。ワクワクする時間が待っている。

(ながた まなみ 熊本大学)

## アクティブ・ラーニングの実践と課題

授業の方法について、熊本大学では第三期中期計画に“アクティブ・ラーニングの普及”を掲げている。それで苦し紛れに一つの試みを実践してみることにした。まず生命倫理や思想史、看護領域における主要な出来事(例えば、ヘルシンキ宣言、フランス革命など)を A4 用紙 1 枚に年代とともに書き出し配布する。次にそれらの出来事を、年代をそろえ以下の3つの枠組み(①世界②医療③看護領域の出来事)に振り分け年表作成を課す。その年表をもとに教員が切り口を指定し、グループで検討を促すのである。例えば、インフォームド・コンセントが医療で根付いてきた経過を述べよ。あるいは看護にフェミニズム運動はどう関わってきたのか、等のように。

学生達が自力で回答を導きだすのは難しい